

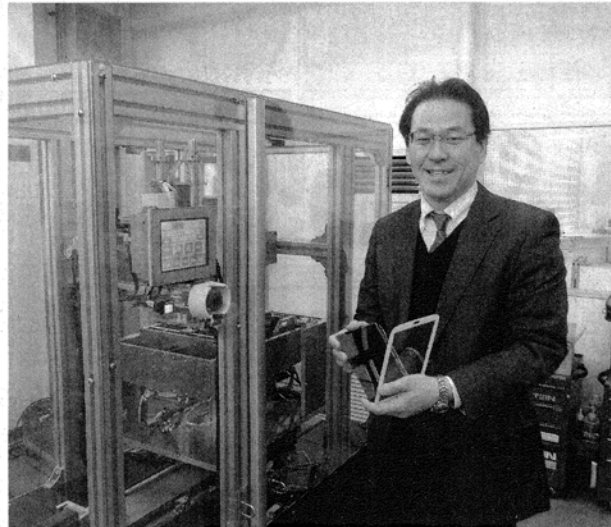
時代をひらく

シャープ出身の植村光生社長48が2003年に設立したFUKは、液晶関連の製造装置を手がけるベンチャー企業だ。本社工場は南北に長い奈良盆地の南端にあり、交通の便が良いわけではない。それでも国内だけでなく韓国、中国、台湾の液晶パネル大手の技術担当者が次々と商談で訪れる注目企業だ。

タッチパネル製造 効率化

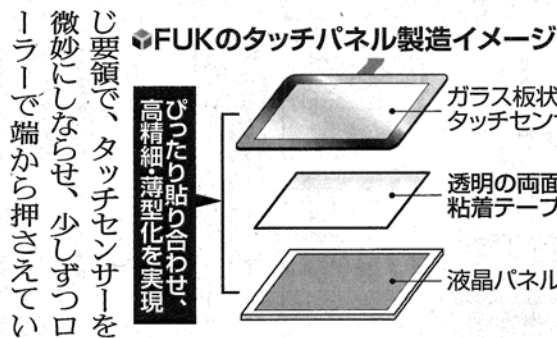
FUK

(奈良県御所市)



タッチパネルの製造を効率化する独自の技術について説明する植村社長（FUK本社で）

タッチパネルは、画像を表示する液晶パネルと、指の動きを検出する薄いガラス板状のタッチセンサーを重ね合わせた構造だ。FUKは、米国の化学大手3M製の透明なシート状の両面粘着テープを使って貼り合わせる方式を編み出した。センサーと液晶をぴったり貼り合わせれば表示のムラがなくなり、薄型化にもつながる。携帯電話の画面に、手で保護用のフィルムを貼る時と同



企業プロフィール
社名はFunctional(機能) Universal(普遍的) Key-technology(主要技術)の略。従業員30人。2014年4月期の売上高は10億円の見込み。奈良県御所市。

液体の接着剤を使う従来方式では、タッチセンサーと液晶パネルの間に隙間ができて、真空状態で貼り合わせをする必要があった。それでも不良品が3〜4割も発生し、スマホなどの価格を押し上げる要因となっていた。

FUKの方式は、大気中で貼り合わせることができ、従来の方式に比べ3割程度安い。消費電力は3分の1で済み、不良品の発生は2%以下に抑えられる。5〜6寸の小型パネルだけでなく、27型まで対応できるのも強みだ。すでに台湾の液晶大手などに約50台を納入した。

韓国や国内の大手との商談も進んでおり、2014年の受注は100台前後に伸びそうだ。

これまでの道のりは平らではなかった。植村社長は、「もうだめかと諦めかけたこともあった」と振り返る。

シャープでは、液晶パネル事業の初期から携わった。36歳で独立、経験を生かして液晶パネルの洗浄装置などを手がけ、滑り出しは順調だった。ところが、08年のリーマン・ショックで液晶大手は一斉に設備投資を凍結した。その後1年間の受注はゼロ。局面を打開する糸口を探る中で、大手の技術者が漏らした「タッチパネルを大気中で貼り合わせられたら、世界的に売れる」という一言が、起死回生のヒントになった。

将来は、得意とするシートやフィルムを貼り合わせる技術を、食品や包装など液晶パネル以外の領域に広げ、経営をより安定させる考えだ。

(三宅隆政)